

を受くるは全國民と共に深く感謝する所なり、滿鐵奉天地方事務所長は一行を志城飯店に招き、開口まづ石川氏の奇禍を慰藉し、一刻も速かに平癒せん事を祈り、此地に於ける先人苦心の跡、内外人士の活動狀況、國民の覺悟將來の抱負等を詳述し、一層提携努力せん事を請はるゝに對し、本團長奈良縣郡山片山町長は、一行の視察目標は恰も當地方在住者と見を同じくするものにして、相共に協力解決の任にあたるべきもの、幸ひに斯る機會を與へて親交を重ねらるゝを深謝し、殊に團員石川老人の災厄に對し、即刻深厚なる配意を忝くしたるを深謝し、歡談時の移るを覺えざりき。

二十九、石川泰三氏の奇禍

群馬縣伊勢崎町長石川泰三氏は、本團員中の年長者なり、滿鐵地方事務所長の招に應じて、一同と共に會場たる千代田通り志城飯店に入らんと、車道を横斷せる刹那、後方より暴進せる自動車を避くるや、更に第二の自動車にひき倒され人事不省に陥れり、衆驚愕直ちに滿鐵病院に運び、應急手當を施せるに幸ひに生氣を得たり、負傷をあらたむるに顔面手臂腰部に些少の打撲擦過傷を負へるのみ、數日の静養により全治すべしと醫師の診斷あり、氣丈なる氏は何等苦痛なし諸氏と行を共にすべければ安堵ありたしと述べられたるも老齡加ふるに寒冷の地に向ふなるを以て、或は事なきを保せずと、本會より松村書記同縣人として田島氏専ら看護に任じ、滿鐵奉天病

院長其他諸氏の厚意により、經過極めて良好殆ど全治し、大連にて一同と合し、旅順にては二〇三高地東雞冠山へも自動車を驅り、壘濠内にも進入しバイカル丸にては、常に甲板上に散策し、門司に出迎へたる伊勢崎町會議員に護られて、歸郷せられたるは不幸中の幸なりき、さるにしても異郷に於ける不慮の難に對し、各方面の厚意は深謝すべきなり。

三十、撫順炭礦

世界的埋藏量を有する撫順炭礦は、我獨創になる採炭法より、従業員四萬六千五百七十六人を役し、目下一日平均二萬噸を採掘しつ

つあり、抑々この炭礦は六百年前高麗人により、陶器製造の燃料として、採掘せられたるも、清朝乾隆年間に、宗祖の墳墓に近きを以て、風水に害ありとし、嚴禁せられたるも、我明治二十七年清國人政府の允許を得採炭をなし、其後露國森林極東會社の有に歸し、明治四十年滿鐵會社の手により採掘する事となり、嚴密なる地質礦層調査の結果は、礦區面積東西四里、南北一里にして千八百二十一萬坪、地質年代は第三紀瀝青質、長焰、炭層厚きは二百八十尺薄きも七十尺にして平均百三十五尺、總埋藏量十億噸なるを確め、深さ千二百尺の東郷大山の二大立坑と、舌城子に露天掘をなし、年六百萬噸百年採炭計畫を立て、發電硫酸骸炭の三工場及び、最近炭層上部